まわりをまわって話をする時だけハンドカスターを打つ。でんでん虫が角を出す所など自由表現。又、ハンドカスターの鳴き方にでんでん虫がついて歩くのも面白い）

以上、狭い経験の中から記してみたのだが結論としては、楽器の技術的な練習に苦しむのでなく、簡単で、美しく、いかにたのしく子どもたちの合奏、子どもたちのあそびとしていくかということに重点をおくということを改めて強調したいと思う。

（お茶の水女子大学付属幼稚園）

競争あそび

村田修子

幼児が競争あそびをする場面を考えると、それのもつ意義を十分に発揮して遊べる、つまり、自分の力を出しきって競争して遊ぶ、というのは大体が自由遊びの場面である。或る発案に何人かの子どもが賛成して出来上ったグループで競争をするときは、それに参加するという人自体が、「しよう」という意欲のある人なので、そこにはもり上った気分がかもし出される。そして子どもたちだけでも夢中になって長い時間つづけて行われる。

そこにちょっと先生でも入ろうものなら、よけいに競争心をわきたたせてくる。この場合は他の遊びをしていた人たちも大抵応援の方にまわり、一応それに参加したような形になる。けれどこうして自由遊びの中でしていると、競争あそびに参加する人、というのが大体きまってしまう。それは大体が男の子で活ぱつな積極的な子である。

こういう人たちにて、段々とむずかしいきまりのものを指導していってもついてきてどんどんする。そして簡単ではあるが、一応の技術のようなもののみこんで、いやが上にも興味をもつようになってくる。たまに積極的な女のお子さんが参加することもあるが、割合いに長つづきしない場合が多い。なんとかして参加させようと試みたが、たいていは全然といっていいくらい関心を示さない。

参加しない理由について考えてみると、

競争する、という意議は三歳位のときからあるけれども、四・五歳になると、単なる競争というものに、ちがう要素が加わって、全体の中の自分の位置、という比較的な見方をするようになるためか、気の弱い子、自信のない子、逆に勝気な子、は参加しなくなってくる。

勿論、グループで競争する、ということを幼稚園の時期にみんなに理解させる、というのは無理な段階で、本当にその意味が分ってくるのは小学校の二、三年位なので、幼稚園では目標をそこまでもっていかなくてもよいと思う。ただこの時期は一人一人の子どもの環境によって個人差が大変にある状態である。けれど、そういうものの面白さを幾分でも味あわせたり、目ざめさせたりしたいと思う。幸い、先生が何かしていると幼児はついてくるものである。今までの経験から、たとえば、「活ぱつに遊ばせるようにしよう」という意図をもって接すると、それを言葉でい

わないでも、先生の様子やすること、そのこと自体が幼児には一つの大きな刺戟となり、たしかにそういうことに好んで参加する子どもが多くなる。だから、子どもに理解出来てそして簡単で面白いものから経験させてひっぱっていくのがよい方法である。

又もう一つ、百聞は一見にしかず、で、そういうものをみる、ということは私たちが考えている以上によい刺戟である。

三歳の子どもが親につれられてサッカーをみてきてから、「先生チャッカーちょう」といい出したり、

テレビが普及してきて、見る機会が多くなったせいか、おすもうの時間にはおすもうが多く行われ、しかも行司、呼出し、アナウンサー、お辨当はこび、太鼓うちまであらわれるといった工合。

運動会でリレーをみてきてから、リレーごっこがはやって朝くるとすぐからはじまったり。

これなどはこのよい例である。

自由遊びのときに全然参加しないで関心を示さない人については、或る人が負けたということが自分や他の人にはっきり分らないようなものを、リズムのときにからめて行うこともよいと思う。幼稚園ではリズムに参加しないという人は極くまれであるので、そのときにからめてするとたやすく参加し、すれば面白さを幾分でも感じてだんだんに自分から加わってくる人も出来てくる。

子どもと一緒に競争あそびをして、いろいろの場面にぶつかったその雑感を少しあげてみる。

子どもは場合によって判断して適当な行動をしたり処置をするということ、つまりゆうづうが出来ないことは幼児の精神発達の上から当然のことである。

どこの園でもそういうことはあると思うが、子どもが活動している間に、何ということなく、本当に知らない間に、目にみえないきまりというものが出来る。それには子どもの中ら生れたよいものもあるが、反対に悪いとかいうのではないが、あらあらと思うものがある。その一つ、

或るとき遊戯室に競争の遊具をもちこんでコースをきめて遊んでいるのをみた人が、「あんなところであんなことをしてる」と不思議そう、「遊戯室でも競争してる」とうらやましそう。ここではこうする、この遊具、道具はこうして使う、というきまりを守るというのも大切な面であるが、巾のひろい、いろいろの経験をさせるということも先生として考えなくてはならない一面であることを痛感した。

みんなと一緒にいすとりのような競争あそびをしてだめになった人がしていた会話、

「早くだめになってよかったわね」相手無言

「だってだめにならなければまだしなければならないもの」といった人の顔をちょっとみたら残念そうな顔つき、そして残っているお友達に声援をおくっている。それをみて、ロでは何とかいっているけれども、この人には全然脈がないわけではなかった、と一安心。

ボールとりを二組に分けてするとき、丁度都合がよいので、時によりエプロンの有無によって分けた。親からこのごろエプロンをしていかないといいます、と申し出があり、きがついたら先生はいつもエプロンのない組。

それから赤と白の運動帽をそなえたら、参加する人はふえ、一層活ぱつに行れた。言葉

でいうより、環境による影響の大きいのに今更ながら一驚。

こういう競争遊びはいろいろとあるけれども、本にかかれているものの大部分は、幼児の程度をこえたものが多い。又その園の種々の環境によっても遊びの選び方はあると思うので、その幼児を一番よく知っている先生が子どもの遊びの中から、又は本にある材料を扱うにしても、その子どもにあったように適当になおしたりして、みんなが気軽に出来るものにして楽しくやらせたいものである。そのとき、先生がどのように適切な助言をし、処置をするか、という扱い方が先生の側の問題として残るわけである。

（お茶の水女子大学付属幼稚園）

× × ×

倉橋先生と新庄先生の共著になる日本幼稚園史が再版になるということを知ったとき、ああよかったと思ったのは、私ひとりではないと思う。いままで園長室に持出禁止となって一冊しかなかった本を、読むのに本当に苦労したのである。今度から自分の書棚にもおいておけると思うとそれだけでも嬉しくなる。幼稚園草創のころのすぐれた人々、豊田芙雄女史、氏原鋹女子などの名前を始めて知ったのもこの書物を通してであった。その後、著者の口からこれらの人々のことを直接に聞くことができて、創設当時の我が国の幼稚園の歴史に秘められた苦心に一層の親しみを感ずるようになったのも、この書物のおかげである。

この幼稚園史は、客観的な資料を各方面から、集めることに苦労が払われている。あるいは公文書から、あるいは蒐集された書物から、また在世者の口から直接に、追憶を集めるなど、その構成は科学的であり、而もその編纂の順序など洞察に富んでいる。このようなしっかりした日本幼稚園史は、今後も決して出ないであろうし、またつくることも不可能である。恐らく世界の何処の国でも、このように立流な幼稚園史の編纂されている国はないと思う。

倉橋惣三 新庄よしこ 共著 〝日本幼稚園史〟のこと

津守真

再版の序文にも誌してあるように、この書物は、「明治二十年前後迄の、いはば創設史である。」どこの国の幼稚園の歴史の中でも、一番面白いのはその創設のころのことである。不思議なほどにどこか似通った人物が登場して、他の学校系統には見られない、教育のスピリットを吹きこんで、それによって幼稚園が生成されてゆく。この書物は淡々として事実をのべてゆくのであるが、その中に私どもは幼稚園の心とも云うようなものを教えられるのである。

二十年の時を距てて後の再版であるけれども、前のと全く同じ活字、同じ装幀で、立派に出来上った新らしい書物を、著者のひとりから頂戴して、その裏表紙にそっと書きつけられた数首の歌の一つを、こっそりとここにとりだすことの無礼を許して頂けるだろうか。幼稚園の歴史に一層の親しみを加えてくれるものだから。

寛きのひとときを欲りてある時し
呑なとたきて書きてありしか

弱き性は人にあはぬをよしとして
一夏を籠り史書きつぎぬ

（昭和九年、著者日本幼稚園史を編むに当つて）